

古代・出雲大社本殿の復元

監修 福山敏男
復元 大林組プロジェクトチーム
協力 出雲大社、馬庭稔



八雲立つ出雲。

科学文明全盛の現代もなお、出雲は人々に限らない歴史のロマンを喚び起こす地である。その中において、古代出雲の歴史を凝縮したモニュメントである出雲大社ほど、歴史とは何かを考えさせる建造物はない。出雲大社は、その歴史性と相まって、建築的にもさわめて魅力ある存在といえる。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、すでに出雲大社の復元に多大な実績を残しておられる福山敏男氏の監修を得て、さらに建設技術を含めた検討をおこなう一方、初めての試みとして応力解析モデルによる構造解析を加え、新たな出雲大社像の発見に挑戦した。

一、出雲大社とは何か

やはらぐる光や空に満ちぬらん 雲に分け入る
千木の片そぎ

建久元年（一一九〇）の春、諸国遍歴の旅に出た寂蓮法師は、出雲の地を訪れ大社に詣つた折に、感銘のあまりこう詠じた。寂蓮はまた、出雲大社の印象を「この世の事とも覚えざりける」と記している。八雲立つ出雲の地にあつて、天空高く雲の中にまで千木を伸ばした大社の威容に、寂蓮は何ごとか崇高なもの、神秘的なものを感じたのであろう。それは、神代の象徴としての出雲大社が、俗世を捨て旅を往くひとりの僧の胸のうちに、人の世の無常を忘れさせる至福のひとつと時を与えたのかもしれない。

と同時に、寂蓮の目は、出雲大社のあまりに巨大な姿に圧倒されたはずである。この世の事とも思えないという驚きの裏には、出雲大社の歴史的な背景ばかりでなく、建築的な側面が大きく影響していたであろう。現存の出雲大社の本殿は、高さが八丈（約二四メートル）ある。超高層時代の現在、この高さの建造物は少しも珍しくはないが、それでもなお出雲大社に参拝する人々は、何か次元の異なる圧倒的な建築スケールに胸をうたれる。まして寂蓮が大社を見た時代を考えると、その感銘の深さは計り知れない。

しかも、出雲大社の社伝によれば、中古には本殿の高さは一六丈（約四八メートル）もあり、さらに時代を遡った上古は三三丈（約九六メートル）もあったといわれている。これは木造の超高層というに相応しい建造物である。そのような巨大建築が、なぜ出雲の地に造営されたのだろうか。

出雲大社はその昔、杵築大社と呼ばれた。「出雲国風土記」の「出雲郡」の神社の項には、その筆頭に「杵築大社」と記されている。「杵築き」とは、社

ベルの高いものがあつたはずである。

また、古代の鏡や銅鐸にみられる家屋文様をみていくと、たとえば弥生中期といわれる鳥取県の角田遺跡出土の土器には、長大な柱と梯子を持つ高床式の建物を描いた絵がみられる。柱と上屋との比率などは、のちの出雲大社を考える際にイメージ的に参考となる。

そのほか、奈良県の佐味田古墳や宝塚古墳から出土した家屋文鏡。さらに、古代出雲を支配したのが海人族であつたことから、中国の華南から東南アジアにみられる高床式建物についても検討材料のひとつとした。

その結果、出雲大社の高さについては、まず三三丈説は現代の技術をもってしても困難であることから排除した。次に一六丈とする説であるが、掘立て柱による約四八メートルもの宮殿建設は、それでも常識を超えた高さではある。しかし、「口遊」を始めとした文献資料が存在すること、さらに出雲大社の建設は、縄文時代の巨木文化から、弥生、古墳時代の高床式建物の建設技術の延長上にあり、その建築スケールからいっても、寺院建築が始まる以前のわが国の木造建築の頂点を示すものであつたらうと考えられる。そこで、復元する大社本殿は、高さ一六丈とした。

三、出雲大社本殿の復元作業

時代の設定

出雲大社の本殿を復元するにあたり、まず高さ一六丈に相応しい時代設定をおこなった。記紀の記述からいって、出雲大社を復元するならば、できるだけ上古の、それも創建時の姿を描いてみたくするのは当然である。われわれプロジェクトチームも草創期の出雲大社像を求めて、高床式を伝え現存の大社よりも古い形を残すといわれる神魂神社を始めとし

を建設する際に地盤を杵て突き固めることをいう。こうした古代の建設用語が、そのまま大社の名となっているあたりに、出雲大社の造営が日本の歴史の中で何か特別なできごとであつたことを窺い知ることができる。事実、「古事記」や「日本書紀」といった八世紀初頭の文献において、出雲大社は全国の神社の中でただひとつ、その造営のいきさつが詳しく語られている。大国主神（命）による国譲り神話がそれである。

記紀の国譲りの条によれば、大国主神は、天照大神の使いに対して自らが拓いた国を譲ることを承知するが、その見返りとして大国主神のための立派な宮殿が造営されることとなる。その宮殿について、「古事記」は「皇孫の天御巢の壮大な構えと同じように、地の底の岩根までも宮柱を深く埋め、高天原に千木の届くほど屋根の高い」建物であるとしている。また「日本書紀」には、「あなたが今後住まうべき天日隅宮は、今、私がつくりましよう。その敷地の規模は、千尋もあるたく繩を百八十結びにしっかりと結んで設定しよう。その宮殿建築の制式は、柱は高く太く、板は広く厚くしよう」と記されている。どちらの表現からも、当時考えられる限りの壮大無比な建造物であつたことが分かる。

では、そうして建設された大国主神の宮殿（出雲大社）は、実際にはどれくらい建築スケールを有していたのだろうか。社伝にあるような、三三丈や一六丈といった高層の建造物が、古代にありえたのであろうか。今回、われわれプロジェクトチームは、出雲大社をめぐるこの素朴な疑問からスタートすることにした。

二、出雲大社と巨大建築の時代

出雲大社の建築スケールを知る上でまず注目されるのは、天禄元年（九七〇）に源為憲が著わした「口

た出雲の神社にも手掛かりを求めた。

しかし、記紀の時代にまで遡るには、現時点では不明瞭な点があつても多すぎることが判明した。そこで文献資料を中心に検討を加えて設定したのが、平安中期の出雲大社である。この前提となつたのは、まず前述した「口遊」の成立が九七〇年であること。また、源経頼の日記「左経記」には、長元四年（一一〇三）に出雲大社本殿が風もないのに振動して倒れた、という興味深い記述があり、巨大建築の存在が窺えること。さらに天仁三年（一一一〇）の「寄木の造営」の際に漂着した流木の一本が、前述したように長さ一五丈、直径一丈五尺あつたとされることなどから、少なくとも平安中期には一六丈の高さを誇る出雲大社が存在したものと考えた。

全体構成

当時の出雲大社を知る資料としては、大社の祭祀

遊である。この本の中に、当時の建造物の大きさを比較して、「雲太、和二、京三」という記述がみられる。これは、出雲大社の本殿が第一位、奈良の東大寺大仏殿が二位、そして京都の大極殿が三位という意味である。

福山敏男氏も指摘されるように、これは殿屋の棟高を比較したものと考えられる。とすると出雲大社の本殿は、高さ一五丈といわれた東大寺大仏殿を凌駕するものであつたことになる。このことから、社伝にみられる高さ一六丈という説が、有力となるのである。

また、天仁三年（一一一〇）に、大社近くの海岸に流れた大木一〇〇本をもって本殿を造営したとの伝承が残っている。その時の余木一本が因幡国に漂着したが、その木は長さ一五丈、直径一丈五尺あつたという。このことから、出雲大社本殿の造営には、かなりの巨木が用いられたことが推察される。出雲大社がいつ造営されたのかは、歴史的にまだ明らかにされていない。記紀の時代をさらに遡る古代に、すでにこうした木造の巨大建造物を建てる技術が存在したのであろうか。今回、プロジェクトチームは、福山敏男氏のご指導を得て、技術的背景についてさらに詳細な検討をおこなうことにした。

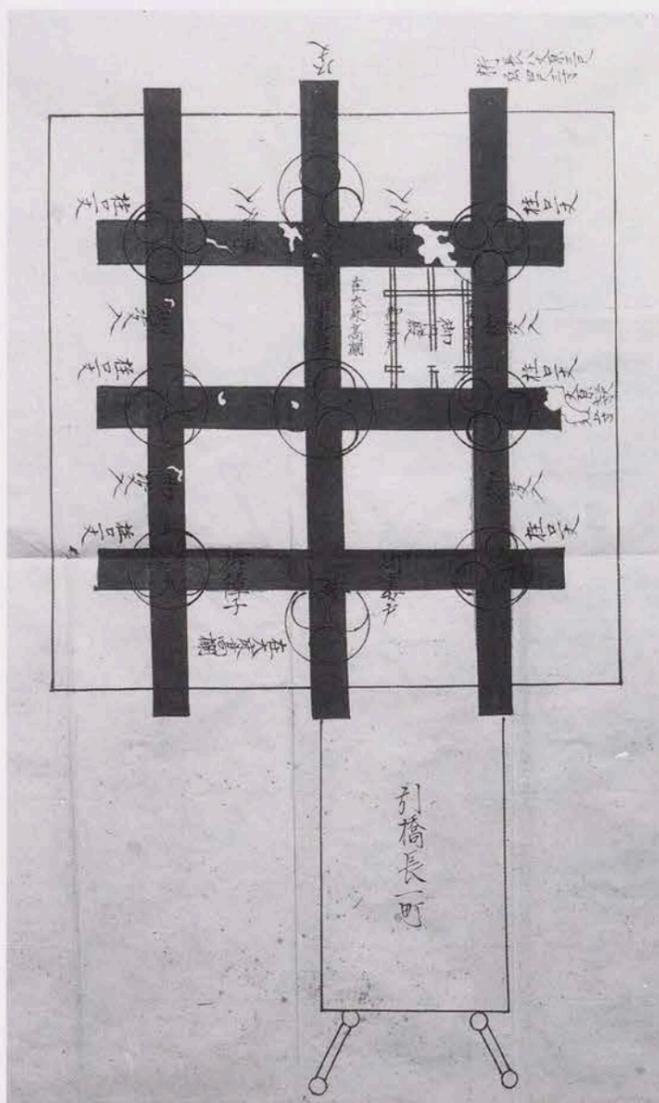
プロジェクトチームはまず縄文、弥生、さらに古墳時代にいたるまでの遺跡や遺物に、古代の建設技術の痕跡を尋ねた（P.10・15参照）。

縄文時代の遺跡では、たとえばイルカ漁で名高い能登半島の真脇遺跡で、直径九六センチメートルの巨木を半割りにして、円環状に並び建てた柱跡と木柱根が発掘されている。それが屋根を持つ建造物の柱であつたのか、それとも神の依り代としての環状柱列であつたのかは不明である。しかし、いずれにしても相当の高さをもつた建造物であつたことが想像される。それだけに、巨木の伐採から加工、さらに建設にいたるまでの技術や道具にも、かなりレ

家である出雲国造・千家家所蔵の「金輪造営図」と「出雲大社近郷絵図」とがある。「金輪造営図」は出雲大社本殿の平面図であり、一定の縮尺で描かれたものと推定され、構造材寸法のほかに、大床高欄があつたこと、引橋の長さが一町あつたことなどが記入されている。また、「出雲大社近郷絵図」は、鎌倉時代のもので、もっとも古い出雲大社の境内絵図でもある。

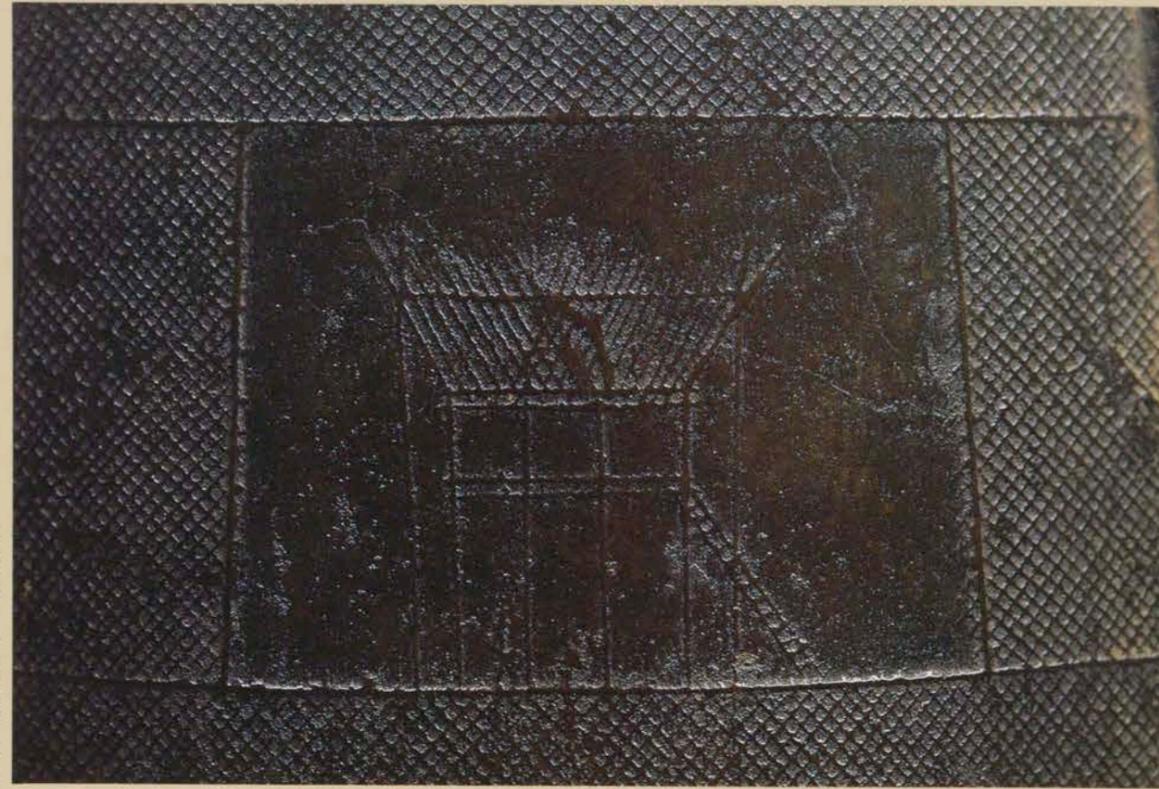
このうちの「金輪造営図」により本殿の平面をみると、正面、側面とも二柱間の正方形で、一辺が計測四〇尺（約一二メートル）あつたことが分かる。ちなみに現存の大社本殿は江戸時代の延享元年（一七四四）に造営されたもので、一辺が三六尺（約一一メートル）である。

まず全体構成をとらえる方法として、柱間の二〇尺を一定のグリッド寸法と定め、正目で全体を割り付ける作業から始めた。この手法は巨大寺院建築の

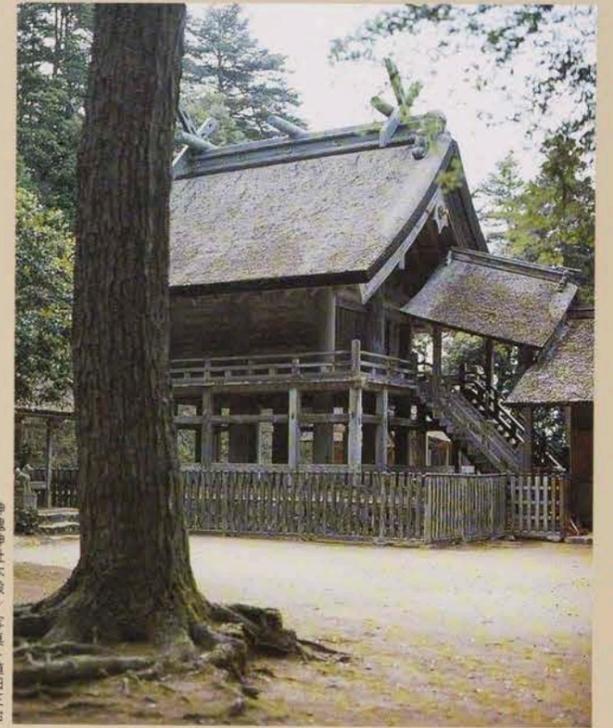


金輪造営図(出雲大社所蔵)

古代高床式建物の参考事例



菱菱櫛文銅鏡、伝香川県出土（部分）
東京国立博物館蔵



神鏡神社本殿 / 写真：植田正治



家屋文鏡 / 富内庁蔵



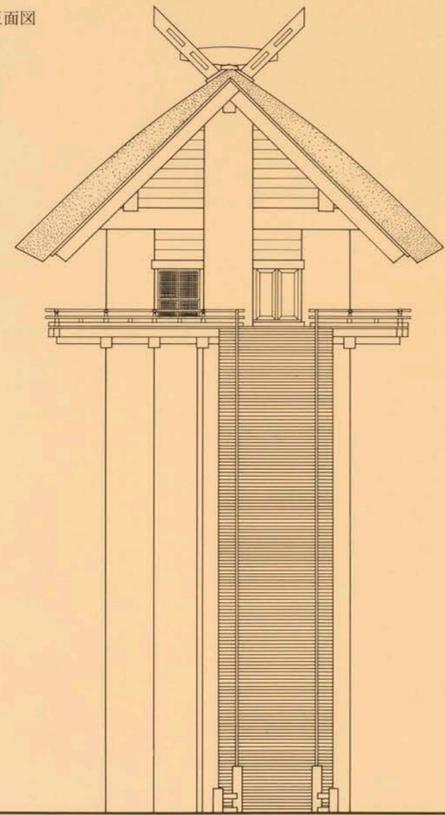
中国雲南省出土、人物家屋銅鏡リ
出典：古代オリエント博物館
「雲南博物館書鏡器展」カタログ



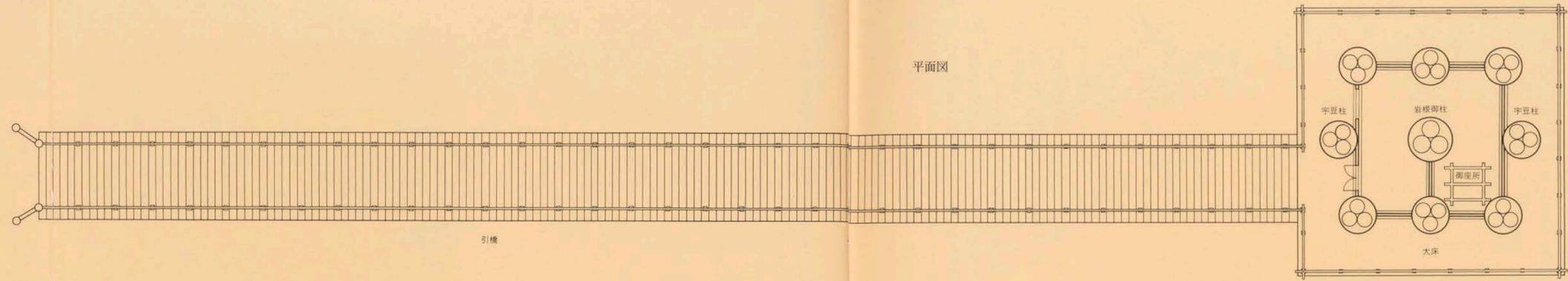
淀江町角田遺跡出土弥生式土器（部分）
淀江町教育委員会蔵

古代・出雲大社本殿復元想定図(平安中期)

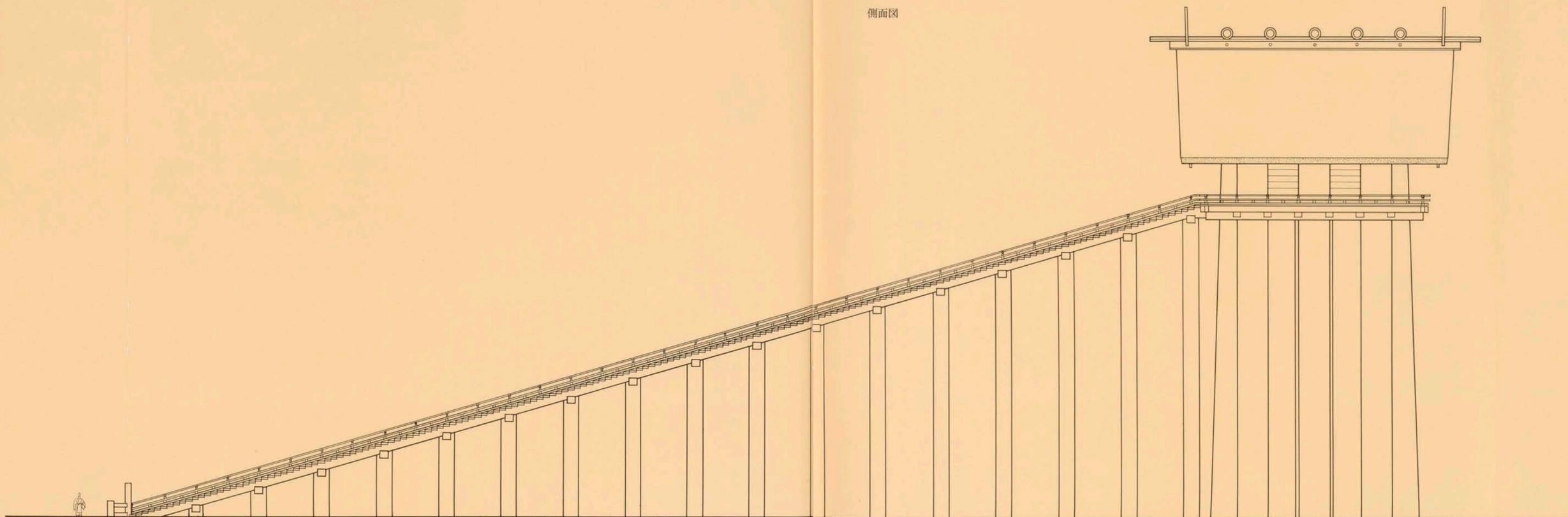
正面図



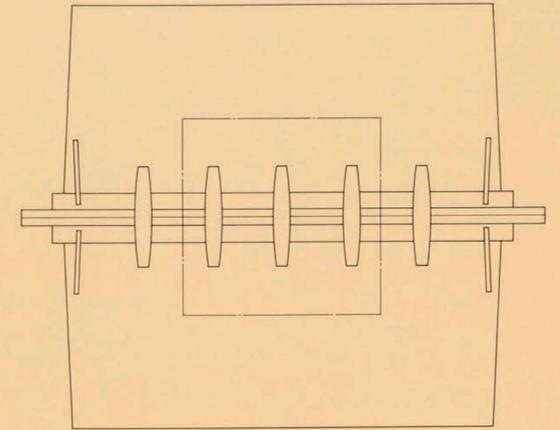
平面図



側面図



屋根伏図



- 古代・出雲大社本殿の概要
- 全 高 16丈(約48メートル)
 - 本屋一辺 40尺(約12メートル)
 - 大床幅 柱芯より1丈5尺(約4.5メートル)
 - 岩根御柱 直径1丈2尺(約3.6メートル)
高さ12丈(約36メートル)
 - 宇豆柱 直径1丈(約3メートル)
高さ14丈(約42メートル)
 - 側柱 直径1丈(約3メートル)
高さ12丈(約36メートル)
 - 引橋 長さ1町(約109メートル)、段数170段



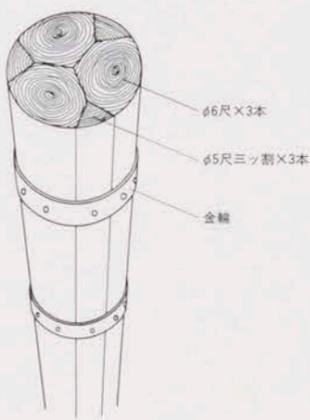
出雲大社近郷絵図(部分)：鎌倉前期/千家国造家所蔵

伽藍配置などにもみられるものであり、ここでは全体のバランスを検討するためにも活用した。

それによると、高さ関係については地盤より五グリッド(二〇〇尺)の位置が高欄床面にあたる。さらに一グリッド上ることに梁下端、そして軒桁の下端となり、千木の先端までの全高一六丈に達する。また平面の引橋部分についても、本殿の柱から引橋の柱を一グリッドごとに配していくと、記述された一町長を形成することができた。

柱について

『金輪造営図』によると、本殿を支持する柱は九本である。このうち中央にある岩根御柱(心の御柱)の直径は一丈二尺(約三・六〇メートル)であり、その前後にある宇豆柱(棟持柱)と、左右六本の側柱の直径は一丈(約三メートル)とある。この直径



本殿柱断面図

からいっても、それぞれの柱は当然一本の太木であったはずはない。『金輪造営図』の柱の表現をみると、大円の中に三つの小円が描かれている。これから判断して、六尺径の木材三本を中心にし、それに五尺径の木材を三割にしたものを補助材としてそれぞれ組み合わせて直径一丈の円周になるように加工し、さらに鉄製の金輪で縛って一本の柱を形成していたと想定した。

井とした。

階段について

また、正面については、『金輪造営図』に「御妻戸」とある部分は板扉とした。その横に、「御障子」とあるのは、福山敏男氏によれば「御隔子(格子)」の誤写であり、ここでは部戸とした。

高欄について

「在大床高欄」と書かれている高欄の床部分は、計測すると柱芯より一丈五尺(約四・五メートル)の幅がある。これは全体のプロポーションからみても美的感覚と調和のとれた意義ある設定と思える。こうした高欄は、佐味田古墳から出土した家屋文鏡に描かれた建物にみられるような縁が、のちに発展した形式であろうか。

本殿内部について
板扉から本殿内部に入ると、正面の一柱間が板仕切であり、その向う側が御神体を祭る御座所(御内殿)となっている。本殿が南向きであるのに対し、御座所は西向きに置かれている。これは出雲大社独特のものとして、現在もそうになっている。

その理由については諸説あるが、千家尊統氏の『出雲大社』では神在祭の神事との関連で説明されている。陰暦一〇月には神無月といわれるが、八百万の神々の集まる出雲では反対に神在月となる。ちょうどその頃、海岸に海蛇(龍蛇神)が寄りくることから、この龍蛇神を八百万の神々を先導する大國主神の使者として日本国中の神々を迎える神事が、大社の西の方角にあたる稲佐浜でおこなわれるのである。西向きの御座所は、そのことと関連があるとされる。さらに、古代出雲を支配した人々が海洋系の氏族であったこととの関連なども指摘されている。

この御座所のある本殿の内部は、現在は上下二段にわかれ、畳敷きとなっている。これも古い形式では板張りと考えられ、ここでは段差のない厚板張りとした。また天井は造らず、小屋裏をみせた化粧天井とした。

古代の出雲大社において、大きな特徴となっているのが階段である。『日本書紀』では、大國主神の宮殿を造営するにあたり、海に遊びに行く時のための高い階段と、浮橋、そして天の鳥船をつくる約束が交わされたことが述べられている。『金輪造営図』に「引橋長一町」と記されているのが、この階段に相当することになるが、一町といえは約一〇九メートルであり、階段が非常に高いものであったことが想像される。階段は、踏面が二尺、蹴上げ約五・九寸として、一七〇段で一気に一〇丈(約三〇メートル)の高さまで駆け上がる。

階段柱は、高欄近くになるほど高くなるが、これは柱一本の長さとしては限界寸法ともいえる。東大寺大仏殿の再建記録を調べてみたところ、直径五尺、長さ九丈一尺の柱が使用されている。そこで大社本殿の階段柱についても、直径五尺と設定し、復元図面には示していないが、梁行の中間部分に横架材を入れて補強することとした。横架材は、この階段が「引橋」と呼ばれていることなどから、階段というよりもむしろ橋脚の考え方を採用したものである。

また、「引橋」の末端部(地表部)には、丸を二つ並べた一対の印が作図されている。これが何を意味するかは不明であるが、本殿正面の階段の昇り口にあたり、きわめて重要な役割を担っていたものと思われる。そこで古代遺跡や神社の例をあたった結果、春日大社などにみられる昇高欄の親柱に近いものであろうと推定した。ただし、出雲大社のものは計測すると直径二尺と大きいため、より原始的な形態で表現した。

装飾について

現在の本殿には、細部にいたるまで数多くの銅板

次に柱の長さであるが、宇豆柱を除く七本は一丈(約三六メートル)であり、宇豆柱にいたっては一四丈(約四二メートル)もある(但し、埋込み部を加算すると一丈増える)。前述した「寄木の造営」では、長さ一五丈の太木が漂着したと伝えられているが、これだけの材木を得るには生木では五〇メートルにも及ぶものが必要となるであろう。当時でもそれはかなり困難なことであったと考えられる。そこで柱については、復元図には示していないが、中間に継手があったものと想定した。

屋根について

本殿の屋根は、現在と同様の切妻屋根であるが、より古い形式を採用し、勾配が四五度の葺葺きとした。なお、破風は反りのない直線であり、通し千木にし、葺葺きには五本の堅魚木を乗せて屋根葺き材を留めた。また、軒は一重にし、丸材の垂木を使用することとした。

壁について

壁については、『金輪造営図』に、「御決入」(御サクリハメ)という記述がみられる。これは羽目板張りを意味している。

現在の大社の壁は、縦羽目板張りとなっている。だが、より古い形式を残す神魂神社にみられるように、かつては横羽目板張りであったはずであり、ここでもそれを採用した。横羽目板張りは、構造計画上、縦羽目板張りと比較して、より耐震性があると考えられる。

装飾が見受けられる。しかし、これは江戸期の造営によるものであり、平安中期の大社にはこうした装飾金物はなかったと思われる。従って、木部はすべて檜の白木とし、簡素な表現にした。

建設について

古代の出雲大社を考えると、もともと難しい問題は、どうやって建設されたかであろう。いわゆる人海戦術により、多くの労働力が費やされたことは当然であるが、そればかりでなく現代では予測もできないような古代人の加工技術と工法をもって築かれたことが想像される。

そのひとつが建て方である。当時は、柱を建てるにあたり、柱頭に引通し穴をあけ、そこに藤蔓などを通し、橋掛りを利用して引き建て起こし、柱脚部は掘立てによって固定させ、柱頭部で梁と桁を折置組みにして組み立てたものと想定した。これは、前述の真脇遺跡にみられる木柱根の遺構や、現在も残る長野県諏訪大社の御柱祭りにみられる掘立て柱の例を参考としたものである。

四、出雲大社の構造解析

今回、平安中期の出雲大社を復元するにあたり、われわれプロジェクトチームは応力解析モデルによる構造解析という新しい試みを実施した。これは出雲大社が、高さ一六丈という木造としては稀有の高層建築であることから、構造面への関心が高まったからである。また、古文献によると、出雲大社は少なくとも長元四年(一一三二)の倒壊以来、造営時より数年から四〇年くらいの間隔でしばしば倒壊を繰り返してきた。こうした倒壊がなぜ生じたのか、この点を構造面から検討するためでもある。

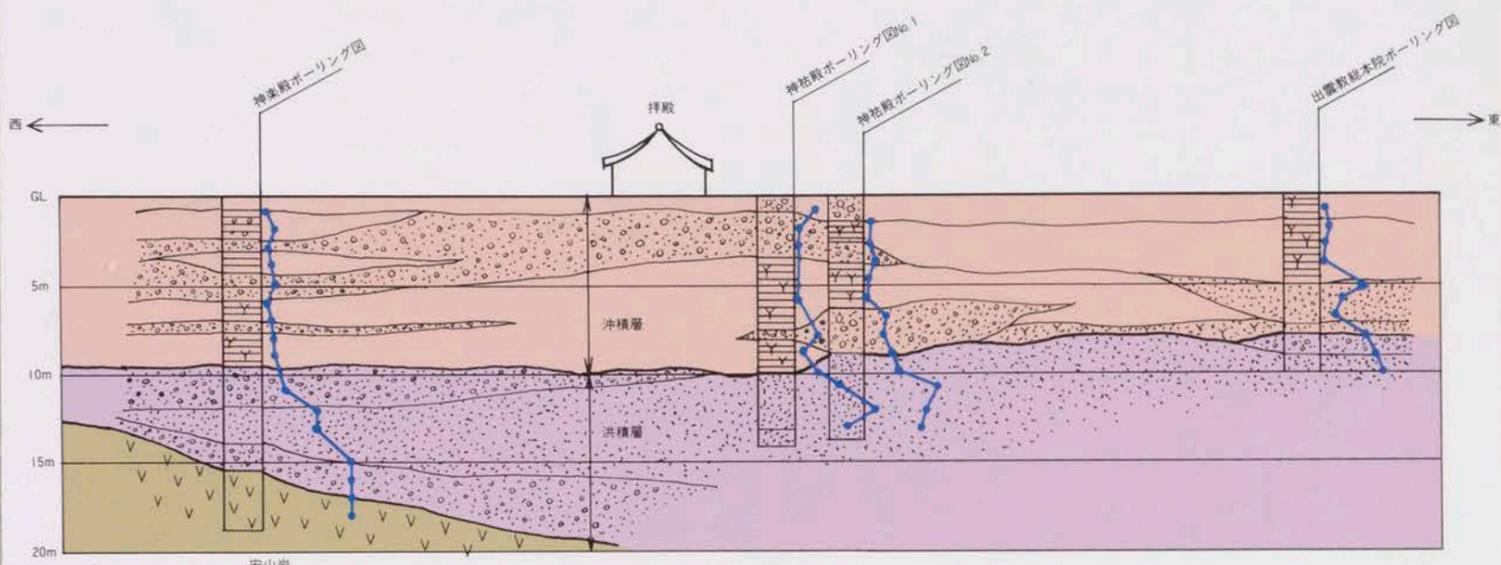


図1 東西(A-A')地質推定断面図

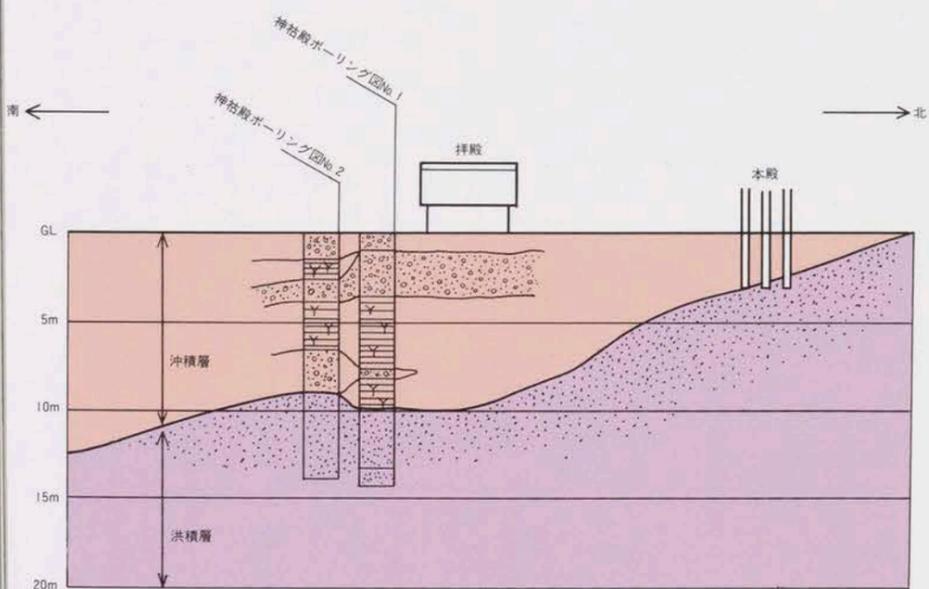


図3 南北(B-B')地質推定断面図

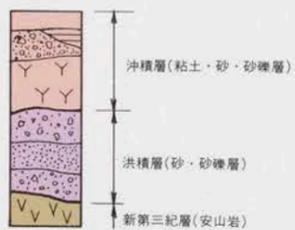
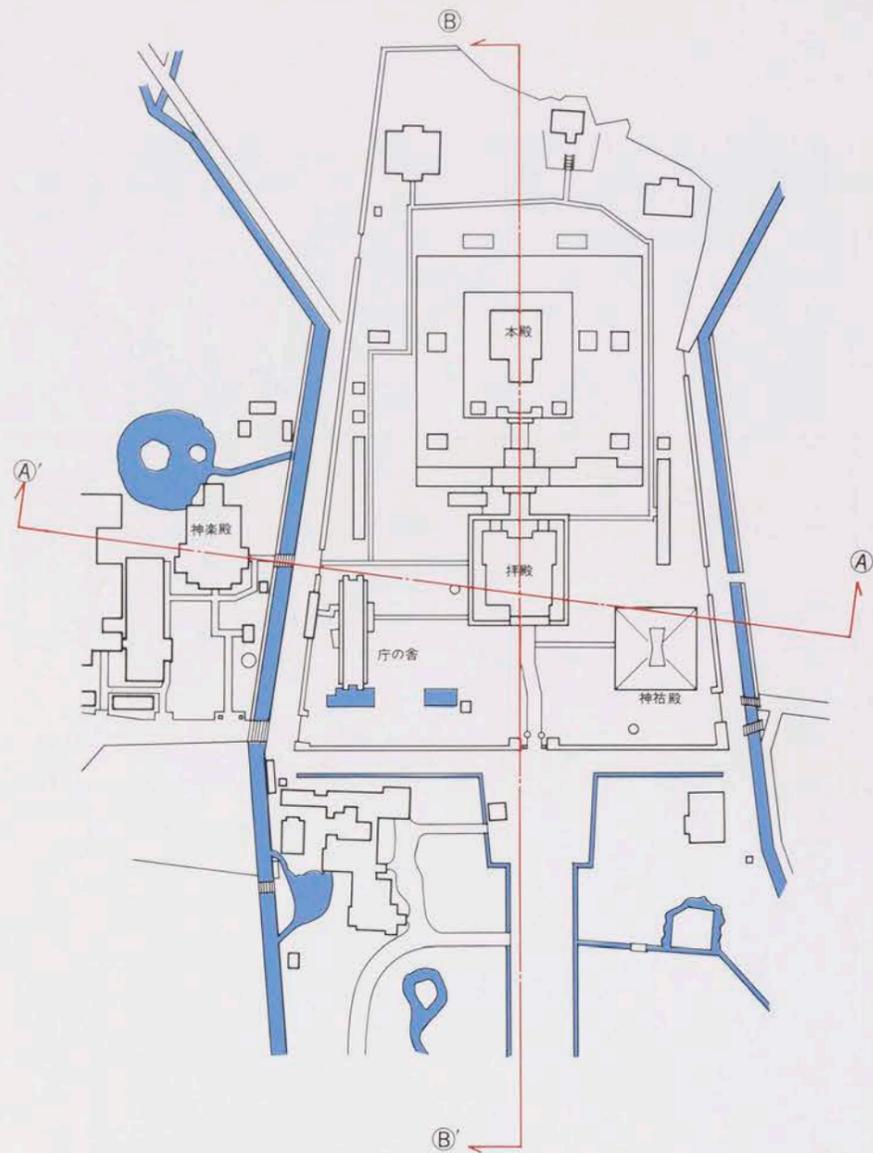


図2 地質構成図



出雲大社現状配置図

出雲大社本殿の地盤関係

現在の出雲大社は、北側に八雲山を控えた地に、南面する形で配置されている。本殿の位置は、寛文七年(一六六七)の造営の際、北寄りに移動された経緯はあるが、八雲山との関係と、その昔は海岸線が大社近くまで入り込んでいた点を考慮すると、立地にそれほど大きな違いはなかったであろう。この前提のもとに、地盤についての検討をおこなった。

八〇メートルの、N値(標準貫入試験による地盤の固さの表示値)が二、一四程度の軟弱地盤層(沖積層)の存在が分かる。これは、大社本殿の東西を流れる素戔川と吉野川の堆積物である。次に、大社本殿部分の地盤であるが、南北方向を通る複数の地質調査報告がないため推定の域を出ない。しかし、本殿の立地をみると、八雲山から南に張り出す尾根の末端部にあたること、また図4に示す推定柱軸力から考えて長期耐力が二六〇三五トシ/平方メートルは必要なことから、図3に示したような南北方向の地質推定断面図を描いた。すると、本殿部分では軟弱な沖積層は浅く、反対にN値三〇以上の固い洪積層の存在が考えられる。この洪積層

は、斐伊川の堆積物である。斐伊川は、現在は東流して宍道湖へと注いでいるが、これは江戸初期の大洪水による流路変更とその後の河川改修工事によるものであり、それ以前は反対に西流し、大社の近くで日本海に注いでいたのである。

また、本殿と接続する長さ一町の階段部分は、軟弱な沖積層を支持地盤としていたと考えられる。この階段の長さは約一〇九メートルもあったことから、階段部分は全体に沈下の生じやすい不安定な状態だったであろう。

本殿の構造計画

本殿の構造計画は、図5(小屋伏図)、図6(床伏図)、図7(軸組図)、そして表1の柱・梁断面リストに示した通りである。

また、応力計算にあたっては、次のように条件を設定した。

- ・小屋組は柱頭に梁と桁を組む折置組みであることから、柱と梁の接合はピン接合と仮定した。
- ・柱は掘立て式であるため、根入れを一丈(約三メートル)とし、現在の「地震力に対する建築物の基礎の設計指針」による基準に従い土圧による水平バネ支承とした。
- ・壁は横羽目板張りであることから耐震要素を考慮し、パネル部材に置き換えて考えた。
- ・地震時の震度係数は、現行の建築基準法の半分に相当する〇・一と設定した。
- ・風荷重時は最大風速を三〇メートル/秒とし、荷重は建築基準法の約四分の一とした。
- ・構造材は檜(比重〇・六)とした。

以上の前提から、応力計算をおこなった結果が、地震時応力図(図8)、地震時変位図(図9)、風荷重時応力図(図10)である。

これらの計算をもとに構造検討をおこなったところ、出雲大社の構造に関しては次のようなことが判明した。

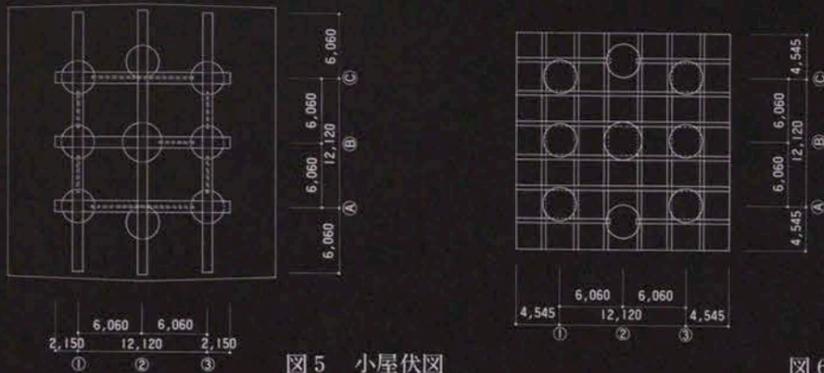


図5 小屋伏図

図6 床伏図

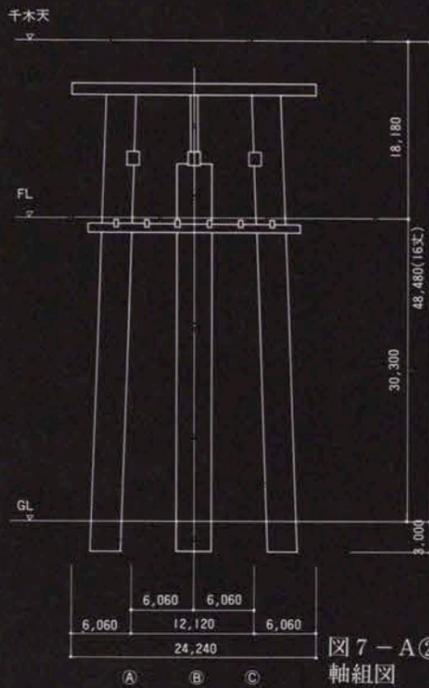


図7-A ②通り軸組図

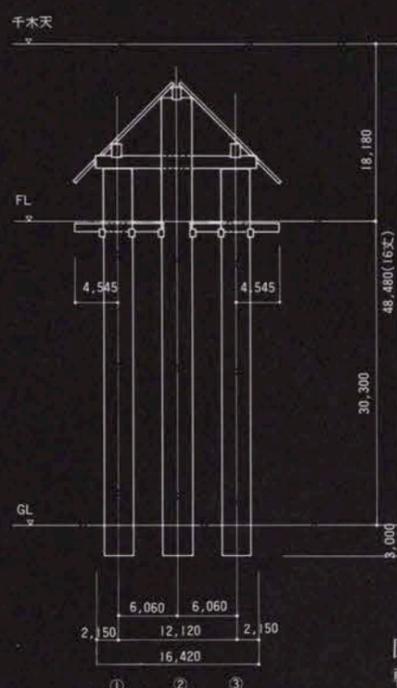


図7-B ③通り軸組図

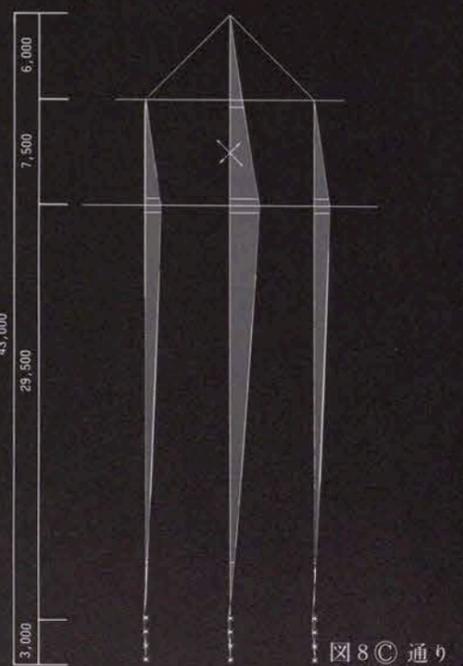


図8 ③通り地震時応力図

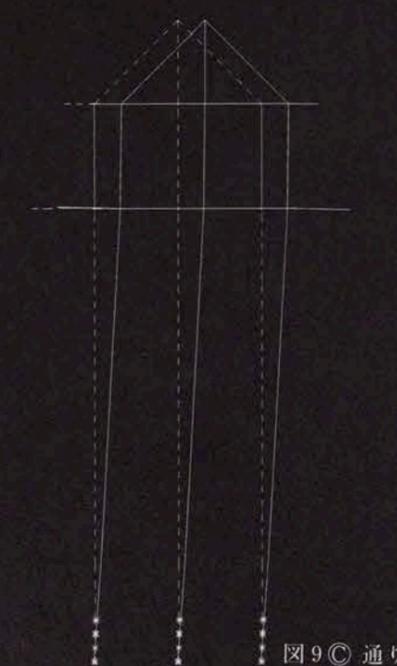


図9 ③通り地震時変位図

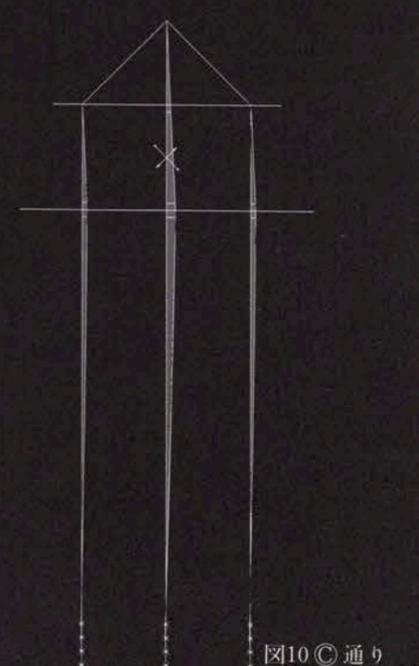


図10 ③通り風荷重時応力図

推定(仮定)断面リスト (単位:mm)

側柱	1丈	3,000φ
岩根御柱 (心の御柱)	1丈2尺	3,600φ
宇豆柱 (棟持柱)	1丈	3,000φ
梁	厚3尺7寸弘4尺5寸	1,120×1,360
桁	厚3尺弘4尺3寸	909×1,303
大引	450×800	
垂木	300×360	
板壁	150t×600h	

(注)柱・梁・桁は「金輪造営図」による断面。
大引・垂木・板壁は仮定断面。

表1 柱・梁断面リスト

階段部の構造計画
次に、長さ一町の階段部分であるが、本殿の柱建方に重要な役割を持つ階段部の地盤の支持層は、前述したように軟弱地盤層と考えられる。そのため、玉石などによる地盤改良がおこなわれたとしても、圧密沈下や不同沈下を起した可能性がある。また、階段部の梁間方向は、掘立て柱、折置組みの梁と中間部分に横架材を入れた架構と考えたが、耐震性能には乏しかったであろう。そこで、当時の建設時には、トラ綱などによって水平力に抵抗する方法が考慮されたと思われる。

●風荷重時(最大風速三〇メートル/秒)では、地震時応力の三〇％程度であり、やはり柱継手部分にどの程度の耐力があるかが問題となる。

●地震時応力(震度係数〇・一)で断面算定してみると、壁の横羽目板が木材(檜)の許容応力度の約一〇〇％である。また、柱材も許容応力度内である。このことから、横羽目板の接合、つまり柱と壁板、壁板と壁板の接合が十分であれば、震度係数〇・一程度の地震(弱震、中震の下程度)には耐えうるはずである。ただし、柱中間部の継手部分については、当時の手法の詳細は不明ではあるが、その強度のあるものとは考えにくい。震度係数〇・一程度の地震があった場合、柱中間部の継手部分から折れる可能性はある。数度の倒壊のうちには、あるいはこうした柱の継手部分からの倒壊もあつたかもしれない。

●岩根御柱の自重は二三五トン、宇豆柱の自重は一九五トンもあることから考えて、当時の柱建方には、相当の困難がともなつたであろうと想像される。

●小屋組の梁、桁梁の自重は一本につき一六七一トンほどあり、部材の荷揚げも同様の困難があつたであろう。

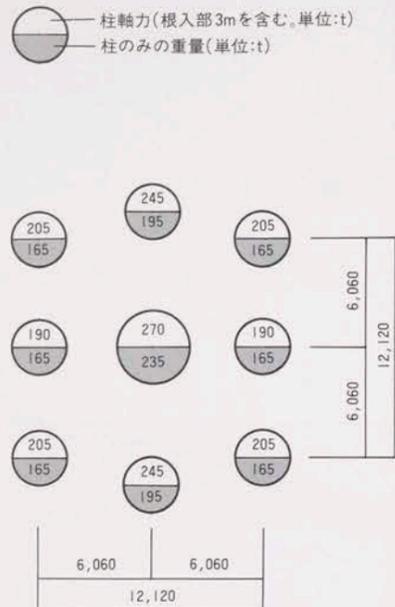


図4 推定柱軸力

以上のことから、倒壊の原因について推察すると、階段部が地盤の弱さから沈下を起し、本殿を引っ張るような形で倒壊した可能性が考えられる。その際、本殿の柱継手の金輪が錆びて弱り、緊結が緩んでいたこともありえる。長元四年の倒壊では、風もないのに倒壊したと伝えられるが、あるいはこうした理由によるものであつたのかもしれない。

構造面から平安中期の出雲大社本殿を検討してみると、現在のような高さ八丈ならば、構造的にも安定していたはずである。従って逆に、たび重なる倒壊があつたことを考慮すると、むしろ高さ一六丈という本殿の姿こそ、より現実的な感を受けるのである。

作業を終えて

平安中期の出雲大社は、八雲山を中心とした小高く緑濃い連山を背景にし、波の寄せる海をすぐ前に望む白砂の上に、長大な柱を立ててそびえていたであろう。雲湧き出る美しい地にあつて、その雲の中に千木を高く伸ばした幻想的ともいえる建築は、まさに「八雲立つ地の宮殿」に相応しい。

神社建築は、寺院建築とは異なり、幾度も造り替えをよぎなくされてきた。この経緯により、様式的には創設時の建築を忠実に守りつつ、細部の技法を洗練させながら今日に至つたものと考えられる。

そのうちでも大社造りは、実に簡明な美を基本としている。とりわけ出雲大社の場合、その背景には歴史の集積があり、蓄積された文化の深みがある。今回、復元された出雲大社の素朴で悠然たる風格の中に、そうした意味合いと、さらに神との交流を図ろうとした古代人のスケールの大きなロマンを感じていただければ幸いである。

最後になつたが、今回の復元作業にあたり、福山敏男氏のご指導と、出雲大社、建築家・馬庭稔氏のご協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。